

# 地域を支える 1004



## すみれ学級

子ども食堂で貧困支援

### 「手をこまねいてはられない」

大分市の公益財団法人「すみれ学級」は、大分市や別府市で子ども食堂の運営や、子どもたちへの学習支援教室を開いている。同法人理事長の藤井富生さん(74)は、自身が食事に困った経験から、食べ盛りの子どもの貧困問題に心を痛め、支援に乗り出した。「本来は行政の仕事。でも、だからといって手をこまねいているわけにはいかない」と藤井さんは話す。

藤井さんが子どもの貧困問題を最初に耳にしたのは、新聞記者から都市部での子どもの貧困問題について聞いた時だった。「子どもの貧困の報道は都会の話だと思っていた」。大分県内で薬局を展開する「株式会社そうりん」を創業し、社長を務めていた藤井さんは、すぐに県内の現状を調べた。すると、同じように貧困に直面する子どもたちがいることが分かった。2016年、社会貢献事業として会社が管理する空き物件で子ども食堂を開いた。

ボランティアでの支援を始めた動機について、藤井さんは「飢えがどんなに悲惨かを知っているから」と振り返る。学生時代、ベトナム戦争

の反戦運動に参加し、大学を中退。親からの支援が止まった。生活が苦しくなり「実っているイチジクを食べ、瓶集めなどでつないだが、栄養失調で2回倒れた」と振り返る。「大分市内でも、長期休業明けは顔色が悪く、1週間後には元に戻る子どもが見られる」。藤井さんは、小学生在が満足に食事を取れない現状に危機感を強めている。

すみれ学級は現在、県内6カ所の子ども食堂で朝夕を中心に食事を提供している。大分大学の学生にアルバイトで来てもらい、食事の前後に勉強を教えるところもある。「食事を取れない家庭では学習習慣が身に付いていないことが多い。両輪でやっていくのが大事」と藤井さんは解説する。

すみれ学級の取り組みは地域に定着しているが、藤井さんは持続可能な活動にするためには課題が多いと感じている。「やはり運営は厳しい。会社からの持ち出しも多額になっている」と明かす。金銭的な支援や現物の寄付をしてくれる個人や企業などが増えてきたため、18年度からは公益財団法人に移行したが、財務状

況は不安定なままだ。

新型コロナウイルスも大きく影響した。子ども食堂は感染防止対策を取りながらほぼ通常通り運営を続けたが、追加のコストは少なくない。さらに家計が苦しくなった家庭も出てきているとみられ「3、4日同じマスクを着けている子どももいる状況。そうしないと食費を削らざるを得なくなる」と藤井さんは指摘する。

支援が必要な家庭にどうアプローチするかも課題という。「本当に困っている子どもを私たちのところに行かせられない親もいる。他人の目やプライドもあるのかもしれない」。積極的に地域や団体からの支援を受ける家庭よりさらに生活が苦しい家庭の実情は、行政や支援団体を通じても可視化されていないという心配だ。

藤井さんは「子ども食堂は、親が帰ってくるまでの居場所であり、コミュニケーションの場」という。「暗闇にずっといると、そこが暗闇だと分からない。子ども食堂は光だと思え」と強調。財務状況が許す限り、子どもたちへの支援活動を続ける考えだ。【戸高浩太郎・大分支局】